

一個人として、 バランスのとれた 暮らし方がしたいね。



良恵

友だちの路子さんが、子育てが一段落してから、ふと周りを見ると、ひとり取り残されたような気がするって。社会とつながってないような感じもするって言ってたわ。



啓

地域の人たちと交流したり、仕事や趣味などにチャレンジしてみてもいいかな。家族以外の人とのつながりも大切だよ。



良恵

そうね。私の母もボランティア活動始めて、長年“良恵ちゃんのお母さん”って呼ばれていたのが、苗字で呼ばれるようになったってうれしそうだったものね。



啓

地域活動は身近な人との交流だし、生活にも広がりができるから、男性も若い頃から地域との関わりを持つのはいいことだよ。仕事、家庭、地域生活と人にはそれぞれの場面があるけど、それらをバランスよく保って、暮らしていきたいね。



ボランティアグループ【サークル ラ・ポ】の紹介

いきいき活動、やりがいみつけた！

触って楽しめる
立体絵本と布の絵本の制作を
おこなっている【サークル ラ・ポ】。
裁縫が得意な女性たちが集まり、
和やかな雰囲気の中
活動が進められています。



平成4年に香芝市図書館ができ、目の不自由な人たちにも絵本の楽しさを知ってほしいという思いから、翌年に活動が始まった「サークル ラ・ポ」。ふたかみ文化センターの地下書庫内で、毎週火曜日の午後、視覚障害や幼児のための『さわる絵本』『布の絵本』の作成をしています。約15人のメンバーのほとんどが、実際に図書館でこの立体絵本を手にし、活動に参加することを決めたといいます。「『さわる絵本』は主に視覚障害児向けになっていて、絵本を作ることを通し、点字ブロックに物を置いてはいけないなど、それまでに見過ごしがちになっていたことに気づくようにもなりました」「メンバーは20代後半から70代までと幅広く、人間関係も広がり、生活にも張りが出てきました」。と皆さんは話します。代表の岡 喬子(おか たかこ)さんは「全員が家庭と活動を両立し、なかには仕事をしている人もいますよ。活動をはじめて、夫が家事の協力をするようになったり、できることは自分でやるというように、家族の意識が変わってきた人も多くいます。これからも、ひと針にたくさんの思いをこめて、作品を仕上げていきます」。と輝く笑顔が印象的でした。